

「すずし」の考察

—平安時代の人々の信仰と内面—

高橋 秀子

【1】はじめに

「すずし」は、現代語の「すずしい」に当たるが、「すずし」というと、風や気候といった自然の様子を表すものとして受け止められることが多いであろう。確かに、風や気候を表す「すずし」は、奈良時代の歌集『万葉集』から見られる¹。しかし、平安時代になると、もう1つの「すずし」が見られるようになる。それは、わだかまりの消えた境地を表す「すずし」である。この用例は、大江千里の『千里集』の歌「わがこゝろしづけきときはふく風の身にはあらねどすゞしかりけり」(34)²に初めて見られる。『千里集』とは、唐詩の一部と同じ内容を詠んだ和歌を収めている歌集である。この「わがこゝろ」歌は、『白氏文集』巻15・852「苦熱題恒寂師禅室」の「人人避暑走如狂／獨有禪師不出房／可是禪房無熱到／但能心静即身涼」の結句「但能心静即身涼」(但だ能く心静なれば即ち身も涼し)の内容を詠んだものである³。つまり千里は、夏の暑さを感じなくなる程煩悩を断ち切った静かな境地を、和歌において「すずし」と表現したのである。この『千里集』の用例以降、悟りの境地や心配ごとがなくなった境地といった、わだかまりのない境地を、「すずし」と表す例が和歌にも散文にも見られるようになる。

ところが、『千里集』からおよそ100年後の『源氏物語』には、境地を表す「すずし」を、登場人物が出家することや亡くなって極楽浄土に往生するという事象に関して使っている例が3例ある。そして、この出家や極楽往生に関する「すずし」は、『源氏物語』より前の和歌や散文には見られない。今回は、この出家や極楽往生に関する「すずし」の用例からどのようなことが言えるのか考えてみたい。

【2】『源氏物語』における出家や極楽往生に関する「すずし」の考察

『源氏物語』における出家や極楽往生に関する「すずし」の用例は3例あり、それぞれ、A. 若菜下巻、B. 権本巻、C. 総角巻に見られる。

A. 若菜下巻

「(前略) 心ぐるしと思ひし人々も、いまはかけとゞめらるゝほだし許なるも侍らず。女御も、かくて、行く末は知りたけれど、御子たち数添ひ給めれば、身づからの世だにのどけくは、と見をきつべし。そのほかは、誰もへ、あらむに従ひて、もろともに身を捨てむもおしかるまじき齢どもになりたるを、やうへ涼しく思ひ侍。(後略)」(③397)⁴

まず、この引用がどのような場面であるか簡単に示しておく。女三宮の後見者として源氏を選んだ朱雀院は、女三宮を源氏に降嫁させて、仏道の修行に一心に勤める。しかし、その朱雀院のもとに、源氏が三宮につれない態度をとっているという噂が入ってくる。心配した朱雀院は、三宮に手紙を書く。このことを知った源氏は、自分を頼りにして女三宮の婿にした朱雀院の思いを自分が裏切っているというように院に誤解されるのは、三宮に、柏木と逢うなどといった至らない点があるからだと思う。そして源氏は、三宮に、仏道に専念しようとする院にこれ以上心配をかけてはいけないということを教諭する。その中で源氏は、自分が若い頃から仏を信仰する心が非常に強くあるということを語る。上の引用はその言葉の一部である。

引用部の内容を纏めておく。以前は、出家をしたらその後のことが心配だと思ふ女性達がい、そのことが自分の出家を引き止めていた。しかし今は、その引き止めることがなくなった、とまず述べている。女御(明石中宮)も源氏の出家を引き止めるほだしであったが、今は子が沢山あるので、自分が生きている間だけでも安らかに過ごされれば良いと源氏は思うようになったのである。そして、他の女性達についても、今はもう自分と一緒に世を捨てても惜しくない年齢になっていると言う。このように、自分の出家を引き止めていた気掛かりなことがなくなったのですずしく思っている、と述べている。

では、「すずし」に注目してみよう。もう一度源氏の発言を眺めると、源氏は、今まで出家に際して気掛かりなことがあったから出家ができなかったが、今

は気掛かりなことがなくなったからすずしく思っている、と言っている。これより、この「すずし」は、出家に際して俗世への執着がない状態を表していると言うことができる。さらに、気掛かりなことがある時は出家に踏み出せなかったことから、この「すずし」の境地は、出家の条件として捉えられているということを読み取れる。

ところで、ここで考えたいことがある。それは、源氏は「涼しく思ひ侍」と言っているが、この時本当にすずしく思っているのだろうか、ということである。言い換えるならば、本当に気掛かりなことがなくなったのだろうかということである。今、女三宮に語っている源氏は、女三宮の腑甲斐なさへの怒りを抱いているはずである。また、引用した箇所より少し前に、源氏は、「さだ過ぎ人をも、おなじくならずへきこえて、いたくな軽めたまひそ」(③396)という言葉を発しているが、この「おなじく」というところには柏木の存在が仄めかされていると考えられる。これより、今女三宮に語っている源氏には、三宮を責める気持ちが強くあると言える。その他にも、源氏の中には、朱雀院が自分を誠実でないと誤解していることへの悔しさも渦巻いていよう。よって、この時「涼しく思ひ侍」と言っている源氏の心は、実際は決してすずしくないのだと言うことができる。

しかし、源氏の心が「すずし」ではないのは、本当に女三宮の所為なのだろうか。そこで思い浮かぶものが、「宿世」である。「宿世」とは、現代語では「宿命」や「運命」と呼ばれるものに当たるが、先行研究を手掛かりに、もう少し詳しく把握しておきたい。

阿部俊子氏は、「宿世」を「過去の世から、その人と共に、その人のものとしてあるもので、現世にその人が生を享ける時から、現実には、事件や、ある関係や状態が実現してはじめて悟られるもの」と説明しておられ、「この『源氏物語』を通じて、作品構成の上の主題とは別に、胸の中に温存していた一筋のものとして、式部は『宿世』というものを考えていたようである」と述べておられる⁵。速水侑氏は、「宿世」について「目に見えず逃れることのできない運命で、それは「前の世の契り」、つまり前世の業・因縁によって決定される」と説明しておられる⁶。そしてやはり、『源氏物語』に「宿世」としてのものの考え方が度々見られることを指摘しておられる。

以上より、『源氏物語』の書かれた時代において、この世で起きることは全て前世から決まっていることで、「宿世」の現れであると考えられていたのだと分かる⁷。つまり、「宿世」によって起こるできごと

は、生まれた時から避けては通れないものであると言える。したがって、源氏が女三宮に怒り、朱雀院への外聞に悩むのも、「宿世」の考え方によれば、源氏が初めから避けては通れなかったことであるということになる。よって、源氏が「すずし」の境地を持つことができないのも、女三宮の所為ではなく、源氏自身の「宿世」の為なのである。

これより、「すずし」の境地は、「宿世」という人間が抵抗できない力によって人間から引き離されていく可能性のあるものだと言うことができる。勿論、「宿世」によるどのようなできごとが起きても、自分の気持ちの持ちようによって、それに対する執着を断ち切れば、「すずし」の境地は得られるはずである。しかし、それを実現できないのが人間の心であるということなのか、ここに描かれている源氏は、これまで出家を引き止めていたことがようやくなくなった一方で、女三宮や朱雀院といった周りの人物に対する執着の心に引き戻されている。

B. 権本巻

宮は重くつゝしみ給べき年なりけり。(中略)世に心とゞめ給はねば、出で立ちいそぎをのみおぼせば、涼しき道にもおもむき給ぬべきを、たゞこの御ことどもに、いといとおしく、限りなき御心づよさなれど、かならず今はと見捨て給はむ御心は乱れなむと、見たてまつる人もをしはかりきこゆるを、(後略) (④346)

この箇所は、宇治の八宮が2人の娘のもとを離れて山寺に籠もる秋の場面にある。「涼しき道」とあるが、『源氏物語』における「道」の用例を検討したところ、この「涼しき道」は出家生活を指すと考えられる。よって、ここでの「すずし」も、心を乱すことのない出家生活の境地を表していると言える。

また、ここには、“八宮は遁世することばかり考えているので「涼しき道」すなわち出家生活に入るのが良いだろう”という語り手の意見が示される一方で、“八宮は2人の娘の行く末を案じる思いが非常に強いので、出家したら、世を捨てたはずの心は必ず乱れるに違いない”という宮の周囲の人々の推測も示されている。この、八宮に対する見解の違いより、八宮は確かにこの世を捨てる思いがこの上なく殊勝であっても、だからといって執着がないわけではない為、「すずし」の境地で過ごすべき出家生活にふさわしくない、ということが浮かび上がる。

C. 総角巻

「いかなる所におはしますらむ。さりとて涼しき方にぞと思ひやりたてまつるを、先つころの夢になむ見えおはしまし。俗の御かたちにて、世中よのなかを深ういとひ離れしかば、心とまることなりしを、いさゝかうち思ひし事に乱れてなん、たゞしばし願ひのところを隔たれるを思ふなんいとくやしき、すゝむるわざせよと、いと定かに仰せられしを、(後略)」(④453)

これは、八宮が亡くなった後、宮の世話をしていた阿闍梨が、宮の娘の大君に語っている言葉である。「涼しき方」とは、文脈より、後出の「願ひのところ」と同様に極楽浄土を指していると言える。

阿闍梨は、亡くなった八宮は世を捨てる思いが強かったので、「涼しき方」すなわち極楽浄土に往生できたはずだと思っていたが、先日宮が夢に現れて、自分は娘達を気に掛けていたこと一つの為に極楽往生が遂げられなかったので非常に残念であると言い、自分が極楽浄土に赴けるように仏事を行ってほしいと告げた、と語っている⁸。

これより、あらゆる執着を完全に捨てた境地でない限り、「涼しき方」に往生できないということが分かる。

【3】『源氏物語』における出家や極楽往生に関する「すずし」から言えること

以上より、『源氏物語』における出家や極楽往生に関する「すずし」について、3つのことが言える。

1つ目は、「すずし」は、人間がこの世に対するあらゆる執着を断ち切った境地を表していて、それは、出家する者や出家した者に求められる境地であり、極楽往生の決定要因となるものである、ということである。

2つ目は、いずれの用例においても、「すずし」とありながら、実際はそこに「すずし」は不在である、ということである。「涼しく思ひ侍」と言っている源氏も、実際は「すずし」の境地ではない。また、遁世の志が深かった八宮も、最後まで執着を捨て切れず、極楽往生も遂げられなかった。よって、この物語において、「すずし」の境地を得た人物は誰もいない、ということが言える。このことより、作者紫式部は、人間が、親しい人や肉親への情愛、物欲といったありとあらゆる執着を一切持たない「すずし」の境地に至ることは不可能であると感じていたのではないかと考えられる。だからこそ、式部は、主人公である源氏に

も、「俗聖」と呼ばれた八宮にも、「すずし」の境地を求めさせながら同時に執着を抱かせ、そして、「すずし」を得る可能性を打ち消していく書き方をしているのではないだろうか。

3つ目は、どの用例においても「すずし」は否定されることになるのに、「すずしからず」といった否定形の表現が一つもない、ということである。このことより、作者が「すずし」をあくまでも理想の境地を示す表現として徹底させたかったのではないかと、ということが考えられる。Aの「涼しく思ひ侍」の「すずし」は、源氏が出家へ向かう為に求め続けた境地であって、実際とは程遠い境地である。Bの「涼しき道」やCの「涼しき方」も、八宮が現実「すずし」の境地を得て赴いたものではなく、理想として望まれていたものである。作者は、人間がその理想の「すずし」を得ることは決してできないという思いから、人間の実際の境地を「すずし」を用いずに表現し、そして「すずし」は、上に見た用例のように、理想の境地の描写に限定して用いているのではないだろうか。

【4】『源氏物語』における往生者の不在と「すずし」を得た者の不在の繋がり

前項で、『源氏物語』における出家や極楽往生に関する「すずし」の用例から言えることを纏めてみたが、これをもとに考えてみたいことがある。それは、『源氏物語』において「すずし」を得た人物が一人もいないということは、『源氏物語』に往生者がいないということと繋がるのではないかと、ということである。

『源氏物語』の往生者の不在について論じた先行研究に、藤倉尚子氏の論がある⁹。藤倉氏は、源信の『往生要集』¹⁰に説かれる臨終行事が『小右記』や『栄花物語』などで行われている一方で、『源氏物語』では全く行われていないことを指摘しておられ、これが、「往生は不可能である」という作者の仏教思想そのものである」と考えておられる。そして、「往生は不可能である」ということは「男女の差別なく、貴賤の差別なく、俗聖の差別もない」ものであって、「源氏物語を通して紫式部は、冷静かつ現実的な視線で、当時の一般的な往生思想に疑問を呈しているのである」と述べておられる。

ここに、「すずし」の用例で考えたことを応用させてみる。Cの八宮の用例がよく表しているように、人間は「すずし」の境地に至らなければ極楽往生を果たせない。しかし、そもそも人間は誰も「すずし」に至ることはできないのだから、結果として誰も極楽往生を果たすことはできない、ということになる。よって、

藤倉氏の論にあった「往生は不可能である」という思想と、人間が「すずし」を得ることは不可能であるということは、同じことであると言える。

【5】出家や極楽往生に関する「すずし」の歴史的な位置付け

『源氏物語』における出家や極楽往生に関する「すずし」の考察が終わったところで、この「すずし」の歴史的な位置付けを行いたい。

冒頭でも述べたように、この種の「すずし」は『源氏物語』より前の時代には見られない。では『源氏物語』と同じ時代の作品にはあるのかと探すと、藤原公任きんとうの和歌に見付けることができる。その和歌及び詞書は次の通りである。

少納言むねまさがほふしになりてしがにあるに
さざなみやしがのうらかぜいかばかり心の内
の涼しかるらん (『公任集』536)¹¹

詞書に見える「少納言むねまさ」とは藤原統理むねまさであり、『本朝世紀』や『御堂関白記』より、長保元年(999)3月末に多武峰で出家したことが知られる。詞書と歌にある「しが(志賀)」は近江国(現在の滋賀県)の南西の地で、琵琶湖の畔であり、統理は出家後、この地にある崇福寺に移ったと考えられている。つまりこの歌は、出家して志賀の地にいる統理に公任が贈ったものである。歌を読むと、公任は、出家した統理の心を“どんなにすずしいことでしょう”と推し量り、羨ましい気持ちを抱いていると分かる。この歌の「すずし」も、出家に関する「すずし」なのである。

以上より、出家や極楽往生に関する「すずし」は、紫式部や公任の時代、すなわち10世紀の終わりから11世紀の初めにかけて生まれた表現であると言えることができる。ではなぜ、この時期に生まれたのだろうか。その理由は、当時天台浄土教の信仰が盛んであったことであると思う。

当時、貴族同士の権力争いがあつたり、能力の有無に関わらず家柄によって役職が決まったりというように、社会が非常に不安定であった。その中で、貴族をはじめ多くの人が、この世を穢れたものと感じ、死後は阿弥陀仏のいる極楽浄土に向かいたいという思い、つまり、厭離穢土・欣求浄土の精神を強く抱いていた。この思いを反映する事柄として、源信の『往生要集』執筆、慶滋保胤よしげのやすたねの『日本往生極楽記』撰述かんがえ¹²、勧学会という念仏結社¹³、出家者の増加が挙げられる。これらは、当時多くの人が仏の救いに与ることのできる生

き方を必死に探していたことを物語っている。そして、その精神が具体的な形になって現れているのが、出家や、極楽往生の願望であると言える。よって、その出家や極楽往生に関する「すずし」は、当時の人々の、この世を厭い極楽浄土に生まれることを心から望む思いの高まりによって生じたのだと考えられる。

【6】終わりに

出家や極楽往生に関する「すずし」は、これまでの研究において焦点を置かれてこなかった。中川浩文氏¹⁴と相原咲清香氏¹⁵は、『源氏物語』における「すずし」について論じておられるが、両氏は風や気候を形容する「すずし」も含めた全ての「すずし」を対象としておられる。そして、出家や極楽往生に関する「すずし」については、中川氏は、公任の「さざなみや」歌のそれと同類であるとされ、「浄土は、「微風吹動」する涼しい世界に喩え得るとする仏教思想や、その表現(主として漢訳本の流れから)に導かれたものと、「すずし」自体の和語としての情意性の意味とが結合して成立したもの」と解釈しておられる。相原氏は、B. 椎本巻とC. 総角巻の用例に言及しておられ、「宇治十帖において「涼し」と宗教的なものとの結びつきは否定し難く明確になっているといわなくてはならない」と述べておられる。このように両氏は、出家や極楽往生に関する「すずし」については、仏教との関わりを指摘するに留まっておられ、その用例が出家や極楽往生に関わっているということや、この時代になって見られるようになったものであるということを考察しておられない。

しかし、この「すずし」は、同じく境地を表す「すずし」の中でも、出家や極楽往生といった仏教の具体的な場面に関するという点で、他の「すずし」とは異なるものであり、また、それまでの作品には見られなかったものである。これらを考え合わせると、やはりこの「すずし」は、他の「すずし」と同じ枠の中で考えるのではなく、それ自体の特徴に注目する必要があると思われる。

そして今回、出家や極楽往生に関する「すずし」の用例そのものを対象とし、この「すずし」が表している境地、この「すずし」の使われ方から分かること、また、この「すずし」の歴史的な位置付けや発生の理由といったことを考察した。この考察から考えられることを纏めておきたい。

まず、出家や極楽往生に関する「すずし」は、情愛や欲といったこの世に対する執着を一切断った境地で、それは、出家する者が抱くべき境地であると同時に

に、極楽往生の要因となる境地であるということが分かった。しかし、『源氏物語』において、この「すずし」の境地に至った人物はいない。このことより、作者紫式部は、人間が「すずし」の境地に至ることは不可能であると感じていたのではないかと考えられる。そして、この時代、紫式部をはじめとする多くの人々が、仏に救われることを願ってひたむきに「すずし」の境地を求めながらも、“全ての執着を捨てた「すずし」の境地に至ることはできないのではないか”という思いを抱いていたということも、可能性として浮かび上がってくる。

出家や極楽往生に関する「すずし」は、当時の人々の理想の境地と、その境地を至り得ぬ理想として感じていた彼らの思いという2つを照らし出していると言える。この「すずし」は、当時の人々の信仰と、その信仰における内面を見つめる上での、重要な導き手であると思う。

〈参考文献〉

*執筆者の五十音順、敬称略。

○単行本及び単行本所収論文

- ・今井源衛『人物叢書 新装版 紫式部』吉川弘文館、1994年5月
- ・後藤昭雄「慶滋保胤」『岩波講座 日本文学と仏教 第1巻 人間』岩波書店、1993年11月
- ・鈴木宏昌「『往生要集』と浮舟の出家」『新典社研究叢書 190 源氏物語と平安朝の信仰』新典社、2008年2月
- ・田村円澄「『源氏物語』と浄土思想」『日本仏教思想史研究 浄土篇』平楽寺書店、1976年6月
- ・張龍妹『源氏物語の救済』風間書房、2000年8月
- ・角田文衛『紫式部伝——その生涯と『源氏物語』——』法蔵館、2007年1月
- ・中尾正己『学術叢書 平安文人の思想と信仰』日本図書センター、2003年10月
- ・速水侑『人物叢書 新装版 源信』吉川弘文館、1988年12月
- ・速水侑『平安仏教と末法思想』吉川弘文館、2006年10月
- ・丸山キヨ子『源氏物語の仏教』創文社、1985年2月

○雑誌所収論文

- ・相原咲清香「『源氏物語』における「涼し」「涼しげなり」について——恋愛と出家に絡んで——」『古代中世国文学』第13号、1999年7月
- ・阿部秋生「紫式部の仏教思想」『国語と国文学』第34巻第2号、1955年2月
- ・阿部俊子「『宿世』と「物のけ」」『国文学 解釈と鑑賞』第45巻5号、1980年5月
- ・池田和臣「『源氏物語』の仏教」『国文学 解釈と鑑賞』

第59巻3号、1994年3月

- ・犬養廉「河原院の歌人達——安法法師を軸として——」『国語と国文学』第44巻40号、1967年10月
- ・斎藤暁子「『往生要集』と『源氏物語』」『芸文研究』第45号、1983年12月
- ・田中宗博「『発心集』説話の貴族たちと長明——公経・統理・顕基をめぐって——」『国文論叢』第11号、1984年3月
- ・趙青「『宿世』について」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第17号、1993年3月
- ・中川浩文「源氏物語の「すずし」などについて——その意味の推移と表現における把握——」『女子大国文』第40号、1966年2月
- ・藤倉尚子「源氏物語に見る往生思想——往生の不可能性——」『国文』第105号、2006年7月
- ・柳井滋「源氏物語における「出家」」『国語と国文学』第75巻11号、1998年11月

注

- 1 「あきかぜはすずしくなりぬうまなめていざのにゆかなはぎのはなみに」(2103)、「はつあきかぜすずしきゆうへとかむとぞひもはむすびしいもにあはむため」(4306)。なお、本稿において、歌・詞書・歌番号の引用は、『千里集』以外は全て『新編国歌大観』による。
- 2 『千里集』の歌及び歌番号の引用は、『私家集全釈叢書 36 千里集全釈』（平野由紀子先生・千里集輪読会共著、風間書房、2007年2月）による。
- 3 『白氏文集』の本文及び書き下し文の引用は、『新釈漢文大系第99巻 白氏文集三』（岡村繁氏、明治書院、1988年7月）による。
- 4 『源氏物語』の引用は全て『新日本古典文学大系』（全5巻、柳井滋氏他校注、岩波書店、2005年5月から2007年2月）による。（）内は順に巻数、頁数。
- 5 「『宿世』と「物のけ」」（『国文学 解釈と鑑賞』第45巻5号、1980年5月）。
- 6 「『源氏物語』と浄土思想」（速水侑氏『平安仏教と末法思想』吉川弘文館、2006年10月）。
- 7 「宿世」という言葉は、もともと仏教語の漢訳語で、本来の意味は、仏教における過去の時間の意味である。そして、「宿世」を「宿命」や「運命」と同じ意味として使うのは、日本だけである。このことを、趙青氏が「『宿世』について」（『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第17号、1993年3月）において詳しく論じておられる。
- 8 平安時代において、亡くなった者が極楽往生を遂げられたか否かは、その本人が他者の夢に現れて告げることによって知られると考えられていた。
- 9 「源氏物語に見る往生思想——往生の不可能性——」（『国文』第105号、2006年7月）。
- 10 源信は天慶5年（942）から寛仁元年（1017）を生きた人物で、比叡山の僧であり、「恵心僧都^{えしんそうず}」とも呼ばれる。生涯、天台教学の研究にいそしんだ。『往生要集』は、

永観2年(984)から翌年4月にかけて執筆されたものである。六道それぞれの様子や極楽の様子、極楽で受ける楽を説くだけでなく、念仏の方法として観察の仕方を説いたり、懈怠の対策や懺悔の仕方といった念仏を助ける為の方法、平生と臨終それぞれの念仏の方法、往生の為の善根の作り方を説いたりしている。

- 11 『拾遺和歌集』1336、『玄玄集』53。上記2つの和歌集の詞書と『公任集』の詞書の異同を検討した結果、『公任集』の詞書が最も事実に即していると考えた。
- 12 慶滋保胤は承平3年(933)から長保4年(1002)を生きた人物で(生年については諸説に分かれる)、陰陽道の賀茂氏出身だが、儒教の道を志して大学寮で学んだ。花山朝では大内記を務めた。『日本往生極楽記』は、

日本における45人の往生伝。国史や諸伝、故老からの聞き書きに基づいて書かれた。

- 13 保胤を発起人とする念仏結社で、康保元年(964)より保安3年(1122)まで行われた。3月と9月の満月の日に比叡山の若い僧20人と大学寮の学生20人が集まって、法華経を講じたり阿弥陀仏を讃える詩を詠んだりした。
- 14 「源氏物語の「すずし」などについて——その意味の推移と表現における把握——」(『女子大國文』第40号、1966年2月)。
- 15 「『源氏物語』における「涼し」「涼しげなり」について——恋愛と出家に絡んで——」(『古代中世文学』第13号、1999年7月)。

たかはし ひでこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻
日本語日本文学コース 博士前期課程1年